

公益財団法人 海外子女教育振興財団
AG5 事務局 宛

2021年度 AG5 報告書

1. 報告者	
(1) 学校名	大連日本人学校
(2) 氏名	北村 雅俊
2. 実施体制	
<p>AG5 担当を分掌に位置づけ、研究実践等のコーディネーターとして機能させる。 学校主題研究と連携を図り、研究実践の周知・浸透をめざす。 3年間の取組のまとめとして、冊子の作成に取り組む。</p>	
3. テーマ	
<p>「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」 ～表現活動を通じた日本語支援・バイカルチュラルの資質育成～</p>	
4. 目的と概要	
<p>大連日本人学校では、テーマ達成のため、高い日本語能力の習得を目指し、「表現活動」を活動の柱に据えた。語彙力をはじめ、全体的に日本語能力が高い本校の児童生徒にとって、様々な表現活動に取り組むことが、より高度な日本語能力の習得につながると考えたためである。加えて、本校の支援的な風土を生かし、在籍学級において日本語に課題が見られる児童生徒への日本語支援を行うことが、有効であると考えた。</p> <p>また、バイカルチュラルの資質の中で「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」を重視した。劇的に変化する国際社会の中で良さを発揮するためには、確かな言語能力だけではなく、他者の考えや思いを理解し、受け入れた上で主張できる力が必要だと考えたためである。</p> <p>また、他者を受け入れることや自分自身の考えを確立させ主張することの基盤を「自己肯定感」と捉え、これを高めることを重要視した。さらに、国際社会の中で生涯にわたって良さを発揮するためには、他者を理解し、よりよい人間関係を築く意識やその手立てを学ぶことも重要だと考えた。</p> <p>以上のことから、本校では実践にあたって在籍学級における「表現活動」を中心に、「自己肯定感」や「コミュニケーション能力」などの「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」に着目し、実践に取り組んだ。</p>	
5. 今年度実施した取組み(※研究会や出張等は日程も含め記載してください)	
<p>(1) 実態の把握について</p> <p>①「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」</p> <p>2019年度、本校では日本語能力を把握するため全児童生徒を対象に「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施。結果、小学部1年生は85%以上、小学部2～4年生は95%を超える正答率となった。また、小学部5～6年生及び中学部1～3年生では、ほぼ100%に近い正答率となり、本校の日本語の語彙を理解する力は非常に高いということがわかった。</p> <p>2020年度及び2021年度は4月に入学した小学部1学年のみ「語彙チェック」を実施。平均正答率が80%を超えるなど、昨年度同様に語彙を理解する力が高いことがわかった。一方で、国際結婚家庭の数名の児童の日本語語彙力の課題を認識することができた。</p>	

②「JSL 評価参照枠」と『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部(目標項目)

文部科学省が作成した「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」の中には、子どもの日本語の力を段階分けした「JSL 評価参照枠」があり、本校ではこの評価参照枠とそれをもとにした『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部(以下「目標項目」)を活用し、本校の実態を把握・共有に努めた。

(2)情報交換会・合同研究会への参加

本校では、プロジェクトリーダーの近田由紀子先生の指導の下、マニラ日本人学校・青島日本人学校と連携を深め、情報や実践の交流に努めてきた。今年度は以下の日程により、本校の全教員で情報交換会や合同研究会に参加した。

◇5月22日(土)日本時間 15:00～16:30 第1回オンライン情報交換会(マニラ日本人学校主催)

◇6月19日(土)日本時間 11:00～12:30 第2回オンライン情報交換会(大連日本人学校主催)

◇7月17日(土)日本時間 11:00～12:30 第3回オンライン情報交換会(青島日本人学校主催)

◇11月27日(土)日本時間 15:00～16:30 合同研究会(マニラ日本人学校主催)

◆10月23日(土)日本時間 15:00～16:00 せんせいカフェ(オンライン交流会) ※希望者のみ参加

(3)教育実践 ※指導案については、添付資料を参照のこと

①「表現活動」を重視した授業づくり

「目標項目」を活用してそれぞれの学年・発達段階に応じて課題を捉え、「表現活動」の充実を図り、日本語のより確かな定着を目指した。また、表現活動を通して、他者の考えや思いを受け入れた上で、自分の考えを深め、しっかりと主張していく力を身につけさせること(バイカルチュラルの資質育成)に取り組んだ。

②在籍学級における日本語支援(言葉を広げる活動)

表現活動を中心とした授業実践の中で、本校の強みである「支援的風土」を最大限生かし、在籍学級における日本語支援に力を入れて取り組んだ。また具体的な支援策として、以下の五点の手立てに取り組んだ。

【i】教え合い・認め合い(支援的風土を生かす)

【ii】言葉を広げる活動(実感を伴う理解)

【iii】視覚的アプローチ(思考の視覚化・資料の提示)

【iv】モデル文の提示(表現活動につながる)

【v】ICTの活用(iPad・ロイロノート)

③自己肯定感を基盤に違いを受け入れ、自己の良さを発揮する「バイカルチュラルの資質育成」

多様な価値観があふれ激変する国際社会の中で、本校の子どもたちが良さを発揮していくために、基盤となる「自己肯定感」を高めることや、これから出会う新しい環境・新しい人間関係で良さを発揮していくための「コミュニケーションスキル・ソーシャルスキル」を身につけさせることに取り組んだ。

さらに、本校の認め合える雰囲気を生かして、日本と中国の差異や共通点を探る授業実践に取り組み、資質の育成を図った。中国に住み日本との違いを身近に感じられる環境は本校の強みであり、特に国際結婚家庭の児童生徒の経験など、バイカルチュラルの資質育成につながる教育的資産として活用できる。加えて、この取組によって国際結婚家庭の児童生徒の自己肯定感を育むことも期待できる。最終的には、現地校や在大連企業、他地域・日本国内の学校などとの交流に取り組むことで、表現活動の中で培ってきた資質・能力を実際に活用し、より確かな定着を目指した。

(4)冊子の作成

本校の3年間の取組について、プロジェクトリーダーの近田由紀子先生やAG5事務局の指導・協力のもと、冊子の作成に取り組んだ。

6. 今年度の成果・効果 (※詳細に記載し、成果物があれば添付してください)

(1)学校の体制づくりについて

全教員で目標を共有して実践を積み重ねる学校体制を構築することができた。AG5担当を校内コーディネーターとして機能させることで、臨時休校・オンライン授業の時期も、それぞれの実践を交流して共有することができた。また、校内主題研究と連携することで、効率よく研究を進めることができた。

(2)全教員での共通理解について

「共通のものさし」として「DLA 語彙チェック」や「JSL 評価参照枠」・「目標項目」を活用することにより、各学年の発達段階や各学級の実態・課題を全教員が共有して実践に取り組むことができた。また、各学年の発達段階や課題を把握し、本校の日本語指導について9年間の教育実践を構造図としてまとめた。

(3)表現活動を柱とする日本語指導について

各教科の授業の中で表現活動を中心とした日本語指導を行うことで、児童生徒の学習意欲を引き出し、高めながら効果的な教育実践を積み重ねることができた。また、本校の強みである子どもたちの支援的な風土を最大限に生かし、認め合い学び合う学習環境の中での表現活動を通して、日本語力が十分ではない児童生徒への効果的な日本語支援につなげることができた。

(4)バイカルチュラルの資質育成について

中学部を中心に「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」の育成を目指し、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルのトレーニングを行った。その中で、それぞれの児童生徒が自身の良さに気づき、資質の基盤となる「自己肯定感」を高めることができた。さらに、言葉を適切に選んで表現する力や相手の考えや思いをしっかりと聴きとる力など、社会生活の中で生きる日本語力の育成につなげることができた。

また、大連・中国での生活経験を生かし、日中の比較(共通点・相違点)を行う学習を通して、多様な価値観を受け入れつつ自身の考えを深める資質育成のための大きなきっかけとすることができた。

(5)マニラ日本人学校・青島日本人学校など、他地域との交流

情報交換会や合同研究会を通して、他地域の日本人学校との交流を行った。AG5の活動についての情報交換にとどまらず、国・地域による文化・教育などの共通点・相違点、ICT機器の活用の仕方など、様々な情報について交流することができた。

7. まとめ

取組において、まずは全教員で「実態・課題」について共通理解を図ることが大切であることを実感した。そのために「共通のものさし」を活用し、様々な機会を設定して情報交流や意見交換を行ったことが、それぞれの学年・学級での効果的な教育実践につながったと考えている。各教員がそれぞれ漠然と持っていた課題意識が明確になり、全教員で共通理解を図ることができたことが、最も大きな成果であったと言える。

また、マニラ日本人学校・青島日本人学校との交流を通して、AG5の活動にとどまらない大きな学びがあったことも成果の一つである。国や地域による違いの中から実践のヒントを得たり、目の前の子どものために努力を重ねる姿勢に勇気づけられたりと、非常に有意義な交流となった。

3年間の取組は、非常に有意義なものとなった。

8. 今後の展望

(1)見取り・評価について

数値化・視覚化をしやすいより客観的な見取り・評価の手立てを模索していくことで、さらなる実践の充実につなげたいと考えている。さらに、本校を巣立っていった子どもたちが、どのように学びを生かし、どのように活躍しているかについて、その検証の手立てについても、模索していきたい。

(2)教育実践の継続性について

在外教育施設は教員の入れ替わりが激しいため、教育実践の継続は非常に大きな課題である。教育実践を記録として残すことと同様に、児童生徒の実態・課題を捉えて共有する手立て、さらに課題改善のために教員が目標を共有する手立てについて、多くの教員が入れ替わってもそれらのことが実施できる学校体制づくりについて模索を続けたい。

9. 所感

教員も児童生徒も大きく入れ替わることが多い在外の教育施設において、長い間在籍する国際結婚家庭の児童生徒が中核になり、新しく加わる児童生徒や教員を温かく迎え、支援的な風土を創り上げていることは、本校の貴重な教育的財産になっている。

この支援的風土を大切にして表現活動を中心の柱に据え、本校では教育実践を重ねてきた。その結果として、中国ルーツ・日本ルーツ関係なく、本校では多様な価値観を受け入れつつ適切な表現をしようとする児童生徒が育ってきている。学校中に笑顔があふれている光景、生き生きと学習に取り組む子どもたちの様子が、そのことを実感させてくれる。

本年度で AG5としての本校の取組は一段落である。だからこそ、この3年間の成果をしっかりと残し伝え、支援的風土や教育実践を継続させていくか、本校の学校体制づくりが最も大きな課題だと考えている。

教員も子どもたちも、人は大きく入れ替わるが、本校が築きあげてきた素敵な実践は変わらずに、さらなる発展を遂げたいと考えている。

※記入欄は適宜拡張してください。